

# 中国における少数民族を描いた中国映画

## — 『ココシリ』『トゥヤーの結婚』 『雲南の少女 ルオマの初恋』『雲南の花嫁』 —

板谷俊生  
(外国語学部 中国学科)

### キーワード

中国少数民族映画、陸川、王全安、章家瑞

## 0. はじめに

近年、中国映画は活況を呈している。年間400本以上の中国国産映画が制作されている。そのうちのごく一部だが、多種多様な映画が日本にいながら観ることが可能になってきた。北京で字幕翻訳者として活躍している日本人も出てきた。喜ばしいことである。まだ不十分とは感じながらも以前に比べれば状況はかなり変わってきている。世代的にはやはり第5世代監督—張藝謀や馮小剛等の映画が中国映画市場を占めているのは否めないが、しかし、徐々にではあるが、第5世代以降の第6世代、第7世代監督の映画も市場に出てきている。それだけではなく、海外の国際映画祭において数々の賞も受賞しているのである。彼らのほとんどは第5世代監督の初期作品から大いに影響を受けた世代であるが、第5世代監督とは異なる感性で映画を撮る。明らかに世代間の差異が認められる。大掛かりな映画でなくとも、有名な俳優が出演していなくても、たとえ小粒であっても、存在感のある映画となっている作品が多い。

本編では、そのような若手監督にスポットを当てる。特に中国少数民族の人・文化・社会等を扱った映画を紹介してみることにする。

## 1. 『ココシリ』（原題『可可西里』）

### 1.1 『ココシリ』の背景

ココシリとはチベット語で青い山々の意味である。青海省中部に位置する。

『ココシリ』は標高4700メートルの高山地帯で約6ヶ月のロケを敢行して制作された映画で、

見ごたえのある作品となっている。美しい山々、峻厳な山々、鳥葬、砂地獄、生と死、追う者と追われる者、観るもの心に強烈な印象を残す映画となっている。

チベットカモシカは欧米では最高級毛織物として珍重されるため、密猟が盛んだった。1990年初め頃から密猟が本格化し、100万頭いたチベットカモシカが1万頭に激減した。その保護のために1993年ごろから民間パトロール隊が組織されたのだった。

1996年、ココシリ。チベットカモシカ密猟団の取り締まりを行っていた民間パトロール隊の1人が殺害された。北京の新聞記者がパトロール隊の密着同行取材を許可され、彼の目を通してチベット族の退役軍人リタイ隊長を中心とする民間パトロール隊の過酷な任務、崇高な使命感を全世界に伝えるドキュメンタリータッチの映画である。

## 1.2 陸川 (Lù Chuān) のプロフィール

まず、陸川のプロフィールを簡単に紹介しよう。

陸川は1970年、新疆のある文学一家に生まれた。父が作家の陸天明で、父の妹の陸星児も作家である。このような家庭環境に育って、一番受けた大きな影響について、彼はつぎのように述べている。

「小さい頃、父は私に古文を勉強させ、論語・詩経を暗記させた。父は私に対して啓蒙教育を早くから始めた。父はとても謹厳実直な人で、そのうえ才能があり、いつも静かに創作に打ち込んでいた。父の作品は私にとってとても素晴らしい教育となった。

家には多くの文学雑誌が寄贈されてきていた。『十月』『当代』『收穫』『花城』『人民文学』『鐘山』等。80年代は文学が非常に隆盛した時期であり、内容も充実していた。私は80年代のあらゆる小説を読んだといえる。王蒙、張賢亮、張承志、張煒、莫言、余華、格非、馬原、王安憶、王曉鷹等が書いた10年間のあらゆる小説を読破した。これらのおかげで私はとても素晴らしい素養が身についた。しかし当時私はこのような小説は何の役にも立たないものだと思っていた。」<sup>1</sup>

さらに彼は父の性格についてつぎのように述べる。

「父の文学上の成果がなぜもっと早くに認められなかったのか。それは父が社交的ではなく、文壇にもほとんど友人がなく、酒飲み友達もいないからだ。」<sup>2</sup>

1993年、中国人民解放軍国際関係学院英語科卒業後、北京電影学院に入学し、1998年6月、

北京電影学院導演科修士課程を修了する。北京電影学院修士課程修了と同時に1998年8月、中国電影集团芸術創作人員センター監督に就任する。2001年、華誼兄弟太合影視投資有限公司に陸川工作室が成立する。

陸川の家庭環境は文学的環境であるにも拘らず、なぜ映画の世界に足を踏み入れたのか、またいつごろから映画監督になりたいと思ったのか、について彼は次のように述べている。

「(監督になりたいと思ったのは) 陳凱歌の『黄色い土地』、張藝謀の『紅いコーリャン』を見たときからだ。当時は16歳だった。」

「『紅いコーリャン』の小説を読んで素晴らしいと思ったが、映画を観て小説より力強いと感じ、映画を勉強するのは悪くないと思った。」<sup>3</sup>

陸川の主要作品としてよく紹介される作品は以下の3作品——2000年、20集連続テレビドラマ『黒洞』の脚本、2001年、「尋槍 Xún qiāng」(ミッシング・ガン) 脚本・監督、2003年、「可可西里 Kěkēxīlǐ」(ココシリ) 脚本・監督——であるが、『黒洞』以前の作品について陸川は次のように述べている。

「『黒洞』は私にとって2作目のテレビドラマ脚本だ。『情不自禁』は3作目だ。1作目は20話のテレビドラマだ。マレーシアで書いた。プロデューサーから依頼があり、撮影しながら書いた。あれは習作だ。金儲けのためだった。その後は映画『ミッシングガン』と『ココシリ』だ。」<sup>4</sup>

3年間の助監督を務めた後、監督になり、映画を撮ったわけだが、比較的幸運なチャンスに恵まれたということができるだろう。

2003年に発表された『ココシリ』の受賞状況は以下のとおりである。

東京国際映画祭で審査員特別賞受賞 (2004年)

台湾で金馬獎受賞 (2004年)

香港で金像獎受賞 (2004年)

中国における第25回金鷄獎最優秀映画賞 (2005年) 受賞

最優秀シナリオ賞ノミネート

最優秀監督賞ノミネート

最優秀男優賞 (リータイ) ノミネート

## 中国における少数民族を描いた中国映画

最優秀撮影賞ノミネート

最優秀録音賞ノミネート

最優秀音楽賞ノミネート

第12回北京大学生电影节において最優秀監督賞ならびに審査員特別賞受賞

陸川監督は2作目の映画『ココシリ』で数々の賞を受賞したことでわかるように実力派の若手監督といえる。

### 1.3 あらすじ

つぎに、あらすじを簡単にみておこう。

密猟者を追ってズボンを脱ぎ捨て氷河の中へ飛び込んでいくリータイ隊長たちパトロール隊。捕らえてみれば彼らは密猟者に雇われたカモシカの皮剥ぎの親子たち。彼等も草原の砂漠化が進み、放牧では生計が立ち行かなくなり密漁の手助けをして生きていかざるを得なくなった一団だった。密猟者を追ってさらに山の奥深いところへと進んでいくが、食料が底をつき、カモシカの皮剥ぎ親子たちを山中に放り出せと命令するリータイ隊長。パトロール隊はさらに山に入っていくが、燃料が切れ、一度キャンプに戻ろうと進言する部下のことばに耳を貸さず、逆に部下を動かなくなった車ごと置き去りにして前進していくリータイ隊長。そしてようやく密猟者のポストとその部下たちを突き止めたときはパトロール隊の人間はリータイ隊長と同行してきた北京の新聞記者の2人だけとなっていた。そして、密猟者の手によってリータイ隊長は射殺される。

この物語は実話に基づくもので、陸川監督は以前CCTVのドキュメンタリー番組を見て感動を覚え、映画化に踏み切った。海拔5千メートル、前人未到の地で6ヶ月間撮影。ココシリという題材は第5世代監督の馮小寧が多年にわたって撮影したいとの希望を持っていたが、実現しなかった映画である。それほど困難を極めたロケ現場での撮影だった。

### 1.4 陸川監督語る

つぎに「大衆電影」記者李彦が陸川に行った独占インタビュー「陸川談『可可西里』及其他」<sup>5</sup>を中心にまとめてみることにする。

ココシリは海拔5千メートルの高地。その高地で撮影するのは並々ならぬ体力と精神力が必要だが、一体何を表現したかったのかという問に対して陸川は「人間の生存に関する問題を表

現したかった。寓言といってもよいかもしれない。」とさりりと言つてのける。

ほとんどがプロの俳優ではないキャスト陣を引き連れて非常に苦難・危険極まりないところへ行って撮影したわけだが、一体、彼等にスクリーンの上で到達してほしかったこととは何なのかという間に彼はつぎのように回答している。

『『ココシリ』ではアマチュア俳優が80%を占める。彼らはプロの俳優よりもっとプロらしいと私は感じた。映画の中では誰がプロで誰がアマなのか見分けがつかない。プロの俳優の基準に照らしてオーディションを行ったからだ。(略)

撮影を始めた頃は良かったが、その後、ある町へ行って撮影したことがあった。その町はあまり良い環境ではなかった。毎日、撮影が終了すると食べたり飲んだり遊んだりする。そして翌日撮影を開始すると、彼らの目から光が消えていることに気づいた。この映画の登場人物は狼のようであればならない。彼らの目にはもう力がなくなっていた。もしこのまま撮影を続ければ似て非なるものになってしまうだろうと感じた。～(略)～それで私たちは山へ行き、ゲリラ戦法をとった。(略)

私は何平プロデューサーに手紙を出し、私はこの隊を率いて山に入るが、海拔4700メートルなので人命に関わることが発生するかもしれないと書いた。彼からは君のやりたいようにやりなさいと返事を貰ったので私は隊を率いてココシリに入った。あのときが転換点だったように思う。映画の中の川を渡るシーン、格闘シーンはすべてココシリで撮影した。

この個性的な題材を撮影するのにコロンビア映画会社の支持を取り付けることはとても大変なことで、特にチベット族の俳優を採用する、しかもスターではない俳優を採用することに同意を得ることはとても勇気の要ることだった。私のプロデューサーは多くのリスクを担ってくれた。」

『ミッシング・ガン』では新人らしからぬ監督ぶりでベテラン俳優たちを統括し、彼等に演技をつけ、素晴らしい出来映えの作品となっているが、監督に対する世評は厳しく、あの映画は形式上は陸川の作品となっているが、実質は主人公のベテラン俳優・姜文の作品だとの噂が喧しい作品でもあった。これに対して陸川はつぎのように語る。

「多くのことは時間をかけて説明する必要があるだろう。もし『ミッシング・ガン』しかなければ、私が中央人民放送局で毎日『ミッシング・ガン』は私のものだと叫んでも誰も信じてくれないだろう。『ココシリ』放映後も一つ一ついい映画を制作していけばきっと認めてくれるだろう。」

## 中国における少数民族を描いた中国映画

青年監督の中には地下映画活動をする人たちもいる。陸川には最初からそういう考えはないのかという問に対して彼はつぎのように述べる。

「地下映画は映画館で観客と交流できない。私は私の映画は映画館で観客と交流したいと希望しているからである。また、中国の主流映画体制の中において自由な魂の映画を撮りたいと希望しているからだ。『ココシリ』はいかなる屈服もなければいかなるものも放棄していない。私は主流の市場の中で自由な映画を創作しようと努力する。自由は自分から勝ち取るものだ。若い監督の自由は一本一本の映画を通して獲得するものだ。」

中国の映画市場は海外の大型映画に占拠されている。国産映画監督として陸川は自分の席をどこに求めようとしているのかについて、彼はつぎのようにこたえる。

「中国のテレビドラマについて言えば、アメリカのテレビドラマにもいいものはある。しかし、なぜ中国のテレビドラマはアメリカに勝利することができているのか。それは、中国の一般大衆の生活に近いから、つまりみんな自分のことを見るのが好きだということだ。中国の映画について言えば、自分たちのことが描かれていない、制作された映画は偽のこたえだ。もし、いい映画があれば国内の観衆はやはり自分たちの映画を喜んで観るさ。」

中国の国産映画市場について言えば、現在映画市場を支えているのはやはり第5世代監督の作品である。また、過去青年監督が世に出たばかりのころ撮る映画といえば芸術作品が多かったが、陸川の1作目はとても商業的だった。これに対して陸川ははっきりとつぎのようにこたえる。

「張芸謀ですね。しかし彼もとても苦しいプロセスを歩んできたんだ。この局面はきつと変わる。これは歴史の必然だ。青年監督も必ず日の目を見る時が来る。」

(略)

「青年監督に投資する人はいない、仕方ないことだ。商業映画をとるにしても投資が必要だ。200万の映画で市場を支えることは期待できない。しかし誰が青年監督に3000万米ドルを出資して商業映画を作らせようとするか。武器や甲冑を与えられず、ライオンの檻の中に放り込まれ怪物との戦いが始まる。こんな試合はない。これは屠殺だ。彼らはすべて機関銃、私たちのほうは薄刃の刀で突撃する。我々が勝つとすれば、それは我々が義和団になったときだ。この考えは非論理的だ。現在私たちはまだ同じ条件下で競争できる環

境には至っていない。もちろん、この社会は永遠に公平であろうはずがない。チャンスは自分で勝ちとるものだ。私は徐々に1本1本の映画を通して平等な競争のできる条件を勝ち取れるように努力していく。集客数について言えば、絶対に数字を言っていけない。数字のことを言い出せばすぐに理性的ではいられなくなる。これらの数字の背後には多くの背景があることを見抜かねばならない。」

陸川監督の追及する芸術と市場との一致点について、

「創作従事者の期待するところと観客のそれにはギャップがある。もし観衆の嗜好に迎合すれば永遠にこの点には到達しないだろう。『ココシリ』に対して私はリアルさを出したいと思った。この映画で観衆に震撼を与えようと思ったが、想定通りだった。人は静かに生活を送ることは必要だが、平穏な日常生活の中から真に人の心を揺さぶることができるようなものを探す、これが技量だ。技量の深い監督は遠くまで行ける。」

と陸川は自信たっぷりにこたえる。

## 1.5 最後に

中国映画界における若手監督の厳しい現状に対して恨み言を述べるのではなく、その厳しい現状は現在中国映画界の大御所となっている第5世代監督たちも通過してきた道であり、一步一步前進し、1本1本良い作品を撮っていけば必ず陽の目を見るときが来ると楽観的である。しかし、その楽観は陸川の映画にかける情熱と自信から来るものであることは間違いない。

陸川の1作目の映画『ミッシング・ガン』は陸川の監督としての地位を確立した映画であり、この2作目の『ココシリ』は彼の代表作のひとつとして数えられる自他共に認める中国映画史に残る作品であるといえるだろう。

## 2. 『トゥヤーの結婚』(原題『图雅的婚事』)

### 2.1 王全安のプロフィール

王全安のプロフィールを簡単に紹介しよう。

『トゥヤーの結婚』は2007年2月28日、第57回ベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞した作品である。監督は中国第6世代監督といわれる王全安である。日本ではあまり馴染みのない監督であるが、それは国際映画祭で数々の賞を受賞しながらも日本では彼の作品が紹介されてこなかったことによる。実力派監督であることは彼のこれまでの実績をみれば一目瞭然である。

王全安 (Wáng Quánān) は1965年、陝西省延安に生まれた。1985年、北京電影学院監督科に入学。北京電影学院在学中には彼自身初の脚本を完成させたり、張暖忻監督作品『北京、你早』(『おはよう北京』'90年)に俳優として出演したりと充実した学園生活を送っている。1991年卒業と同時に西安電影制作会社に監督として配属。

つぎに王全安の監督作品を紹介しよう。

1999年『月蝕』を発表。

2000年モスクワ国際映画祭FIPRESCI (国際映画批評家連盟) 賞受賞。

2001年ドーヴィル映画祭最優秀女優賞受賞 (余男)。

2002年ベルリン国際映画祭フォーラム部門上映。

2003年『驚蟄』発表。

2003年中国金鶏奨最優秀女優賞受賞 (余男)。

2004年パリ映画祭最優秀女優賞受賞 (余男)。

2004年ベルリン国際映画祭パノラマ部門上映。

2006年『トゥヤーの結婚』発表。

2007年第57回ベルリン国際映画祭金熊賞 (グランプリ)、全協会審査員賞受賞。

2007年シカゴ国際映画祭最優秀女優賞 (余男)、審査員特別賞受賞。

## 2.2 余男のプロフィール

余男のプロフィールを簡単に紹介しよう。

2007年2月10日ベルリン国際映画祭で『トゥヤーの結婚』の上映が終わると同時に劇場内には熱烈な拍手が巻き起こった。配給会社代表、盧葦カメラマン、王全安監督、余男がステージに上がるとようやく拍手の音が止んだのもつかの間、王全安監督が余男を観客に紹介すると再度雷鳴のような拍手の嵐となり、7、8分鳴り続いた。映画プロデューサーで、今回のベルリン国際映画祭評議員の施南生の話によれば、最優秀映画賞では7名の評議員のうち5名が『トゥヤーの結婚』に投票したという。これまでも数々の国際映画賞を受賞してきた余男も今回は特に感極まり、英語、フランス語に堪能な彼女ではあったが、ステージの上でひと言もスピーチできなかったという。<sup>6</sup>

余男は2001年フランス・ドーヴィル国際映画祭で最優秀女優賞(『月蝕』2000年作)、2003年制作の『驚蟄』では、中国映画金鶏奨最優秀女優賞(2003年)をはじめ、第19回パリ国際映画祭最優秀女優賞(2004年)、第11回中国大学生映画祭最優秀女優賞(2004年)、中国電影表演家協会最優秀女優賞(2005年)を受賞してきた。また、最近では福岡アジア映画祭出品作品『左右』(王小帥監督・2007年作)にも出演している。



余男の家は代々警察官を出している家で、彼女自身も高校入学の頃は警察官を志していた。彼女のいとこ2人（女性）も現職刑事であるという。

高校3年生のとき、北京電影学院が大連で学生を募集したことがあった。彼女は映画には興味はなかったが、受験勉強に明け暮れていた彼女は気晴らしに同学たちといっしょに受験してみたが、結果は大連では彼女1人が合格したのであった。警察官になる夢を捨て、女優になることを夢見て上京した。

王全安と余男との出会いは劇的であった。当時、余男是北京電影学院3年生であった。教室で余男たち学生と教師が口論していた。授業終了後、教師はその学生たち一人ひとりに注意を与えた。反抗するものは余男を除いて一人もいなかった。余男一人だけが反論していた。ちょうどそこへ王全安自身が彼の初作品となる『月蝕』の俳優を探しに来ていた。教師はこの教室に残されている学生はみな問題がある学生だから、他をあたって欲しいと断ったが、王は、問題ある学生が必要なんですと言って、余男を採用したという。<sup>7</sup>

余男は映画『トゥヤアの結婚』の中で唯一のプロ俳優である。その他の出演者は付近の遊牧民。彼女は勝気な性格の持ち主であるため、こういうことをやれと言われてできませんとは言えないタイプの女優で、徹底してその役柄に見た目も感情も入り込まなければ気がすまない性格である。

彼女は遊牧民と同じ衣食住の生活をこの映画のために実施した。彼女の皮膚が先ず日焼けし、その後日焼けジミができた。彼女はカメラを覗いてその自分の顔に大喜び。これでこの役に対して自信がついたのだった。だが、彼女は日焼けするだけでは物足りず、さらに体型を現地の婦人に近づけるために体重を数十斤増やした。その結果、彼女の瓜実顔が丸顔に変化してしまった。

撮影までの2ヶ月間彼女はこの草原でこのようにして彼等と生活をともにした。このわずか600万人民元の映画のために撮影時間を含めると半年以上草原で生活したことになる。<sup>8</sup>

### 2.3 ものがたり

内モンゴル自治区のある草原に住むトゥヤアは夫のパートルと幼い二人の子供と質素ながら幸せに暮らしていたが、夫のパートルが家の前に井戸を掘ろうとして足の骨を折って以来、満足に仕事もできず家に閉じこもりがちになり、その夫に代わり羊の放牧、水汲みから家事までを妻のトゥヤアが一人ですべてをこなさざるを得なくなっていた。特に水汲みが大変だった。1日30キロメートルの道のりを2往復しなければならなかった。あるとき、干草を満載したオート三輪の下敷きになった近くに住むセンゲーを救出しようとし、トゥヤアは腰椎脱臼をおこし入院する。このままでは夫婦共倒れになると心配した夫の姉に勧められるまま、夫婦と義

姉は裁判所に離婚手続きに行くが、なんとトゥヤーは判事の前で、夫と子供たちをつれて再婚すると宣言したのであった。

気立てのよい、働き者のトゥヤーが再婚するとの噂が広まるや、白馬にまたがった求婚者、バイクにまたがった求婚者、高級外車に乗った求婚者が次から次へと現れ、トゥヤーに求婚する。しかし、子供だけでなく夫までつれて再婚という条件にどの求婚者も首を縦に振らない。

隣人のセンゲーは井戸から水が出たら結婚して欲しいとトゥヤーに求婚し、トゥヤーの家の前に井戸を掘り始める。センゲーを憎からず思っていたトゥヤーが出した条件——井戸から水が出ること、センゲーが正式に離婚すること、夫と一緒にいること——をセンゲーはすべて飲み込む。試行錯誤の末ようやく掘った井戸から水が出て二人は結婚することになるが、披露宴の最中、元夫と新郎が取っ組み合いの殴り合いをはじめ、一人パオに閉じこもってトゥヤーは泣き続ける。

#### 2.4 『トゥヤーの結婚』誕生

茅盾文学賞受賞作品『白鹿原』（陳忠実作）は中国の多くの大監督といわれる人たちが映画化を模索したが、実現しなかった作品である。その主な原因は、小説中における政治批判と大胆な性愛描写のためであった。中国ではこの2つは正面きって銀幕の上で繰り広げることは現時点では困難である。しかし、制作会社としては商業的見地から食指をおしとどめるには惜しい。そこで、青年監督の王全安に白羽の矢が当たったのであった。失うものがあまりなく、世に出る絶好のチャンスを手にした王全安にとってこの抜擢は感激この上ない出来事であった。

王全安は『白鹿原』の脚本制作のうえで、強力なパートナーを得た。陳凱歌の『霸王別姫』、張藝謀の『活着』等のシナリオを手がけ、世界的にシナリオ作家として名を馳せていた盧葦（1950— ）である。二人とも西安映画制作会社の人間だった。困難な仕事であることは明らかであったが、君は陝西の人間なのだから陝西の人のために映画をとるべきだよ、との盧葦の一言で王全安は腹を決めた。

彼らは約1年以上かけて脚本を完成させた。しかし最終段階で、会社側の商業主義と真っ向から衝突し、シナリオ『白鹿原』は無期限のお蔵入りとなった。

そんな折、王全安は以前テレビで見た彼の魂を揺さぶり、創作意欲をかき立てたドキュメンタリー番組のことを思い出し、盧葦に語った。甘肅省で起こった実話、「嫁夫養夫」（夫を連れて再婚する）であった。

#### 2.5 王全安監督語る

「私の母はこのロケ地の近くで生まれた。私はこのこのモンゴル人がずっと好きで、彼ら

の生活様式や音楽が好きでした。私は、この無計画な工業開発が草原の厳しい砂漠化を誘引し、また、現地の政府がモンゴルの遊牧民を強制退去させていることを耳にし、すぐさま、あれら一切が消失する前に映画に撮ってすべてを記録しておこうと決心したのでした。そしてトゥヤーの独特な再婚話も当地にあった本当の話なのです。』<sup>9</sup>

なぜ内モンゴルの物語にしたのか、なぜ内モンゴルで撮影したのかについて。

監督自身の生まれ故郷延安に近い上に、監督の母親がロケ現場の近くで生まれ、監督自身内モンゴルの人や生活、文化を比較的 understanding できるからだ。

再婚して前夫を養うという話は内モンゴルではよくあることで、結婚するかしないかは大きな問題ではなく、一緒に生活することが最も重要なのだと内モンゴルの人たちは話していた。この話を漢民族の物語として映画を撮ればまず成功しなかつただろう、内モンゴルの人物にしたのは彼らのほうが開放的だから。

王全安監督の3作品すべてに余男が主演していることについて。

二人は同じ方向に沿って仕事をしている。私は歌劇やSFや武俠映画は撮らない。そういうものは好きではない。私は好きなことだけをやっていくタイプ。例えば、井戸を掘るとすると、たとえ何年かかっても1箇所だけ井戸を掘る。ここは井戸掘りに向かないとか、水がないとわかれば別のところに行くタイプ。

私は俳優に2つのものを要求する。1つは質感、生活の質感。もうひとつは演劇性、爆発力。だから一般の俳優には無理だ。余男が最適だ。

余男以外の出演者について。

バートルはモンゴル族の遊牧民。王全安はバートルの写真を見るとすぐに、この人はきっと演技ができると直感した。

隣人セゲルはモンゴル族の騎手で、いつもたくさんの女性に取り囲まれているような人。王全安はセゲルに近づき、名前を尋ねた後、すぐに、私たちは映画を撮っているんだが一緒に北京に来ないかと話しかけた、という。セゲルはちゃらちゃらとしたものは身につけておらず、女性を喜ばせる話をするのが上手く、ユーモアがある、セゲル役にぴったりと直感した。彼らはオーディションで選ばれたのではなく、監督が偶然見つけた素人集団。

「私はこの映画を美しく力強いものにしたいと思った。映画の主要なロケ地は最後まで移動しなかつたモンゴル遊牧民の家とした。出演者も基本的に現地のモンゴル遊牧民を選んだ。映画撮影では通常撮影で経験するあらゆる困難を経験した。映画が完成したとき、これらの家屋や現地の遊牧民はみんないなくなった。彼等はもう馬に乗った誇り高いモン

ゴル人ではなく、都市郊外の農民となっているか、それとも街角で果物を売っている人になっていることだろう。これは悲しいことだ、私はこれらのかつて美しかった人たちのことを思うと、彼らの悲喜こもごもを映画『トゥヤアの結婚』の中に記録しておきたいと思った。そう思うと心がとても安ら became。自分が映画監督であることに對してとても幸せを感じ、映画に対して敬意と感謝の気持ちで一杯になった。』<sup>10</sup>

「私はいろいろな映画が好きだ。とりわけ美しい映画が好きだ。なにか深遠な道理を語る映画よりも、まず重要なことは美しい映画かどうかということである。そうでなければ本末転倒である。そういう意味では『トゥヤアの結婚』は美しい映画に出来上がり、この点は満足である。

私は映画で今の中国の現実社会を描写している。その理由は簡単にはいえないが、このような映画が少ないからだろう。中国のテレビのスイッチをオンにすれば50あるチャンネルのうち46のチャンネルで時代劇をやっている。いい加減な古代に生活していると錯覚しないだろうか、空を飛びまわるカンフー映画を観れば自分は強壯薬が必要な男であると勘違いしないだろうか。現実の中国社会と中国人は中国映画の中では欠陥だらけだが、この映画だけは例外でありたい。』<sup>11</sup>

## 2.6 最後に

舞台は内モンゴル自治区アラシャー盟。中国で一番降水量が少ない地域、草原の砂漠化が進む地域である。中国政府の無計画な工業開発によって草原の砂漠化に拍車がかかり、さらに政府はモンゴル遊牧民を彼等の故郷のこの草原から強制退去させ、都市への移住を余儀なくさせている。故郷を離れ移住した人たちはどうなるのか。町の食堂で働くか、街角で果物を売るか、郊外で農民となるかということになる。一面の緑に覆われていた広大な草原を馬に乗って縦横無尽に駆け巡っていた誇り高きモンゴル民族の勇姿が近い将来見られなくなるのではとの危機感、焦燥感が王全安監督を支配したのではないか。その結果、彼はすべてが消失しないうちに美しい映像として記録しておこうと心に誓ったといえる。このような思いは『トゥヤアの結婚』と同時期の、たとえば寧才監督作品『白い馬の季節』でもメインテーマとなっている。それほどモンゴル草原の砂漠化は深刻な状況にあるのであろう。

井戸掘りで怪我をした夫と子供を抱えトゥヤアが下した結論は前夫を連れての再婚という俄かには理解しがたい『トゥヤアの結婚』のテーマだが、それはそれとしてユニークでときには滑稽でときには深刻なテーマの作品である。

### 3. 『雲南の少女 ルオマの初恋』（原題『婁瑪的十七歲』）

#### 3.1 『雲南の少女 ルオマの初恋』の受賞状況

章家瑞監督作品『雲南の少女 ルオマの初恋』

2002年ベルリン国際映画祭正式出品

2002年モンリオール国際映画祭正式出品

2003年中国映画金鶏賞最優秀新人賞受賞（李敏）

日本では2007年6月公開。

雲南3部作の1作目。

#### 3.2 章家瑞（Zhāng Jiāruì）のプロフィール

監督の章家瑞は四川省成都の出身。文革中の中学2年生のとき、トルストイ、チェーホフ、シェイクスピアと出会ったというから、こっそりと西欧の文学作品を読んでいたことになる。農村に下放中の16歳前後から習作を書き溜めていたようである。

文革終了後、彼は1979年中央戯劇学院を受験したが失敗し、彼の地元の四川大学哲学科に入学した。しかし映画監督になる夢を諦めきれず、再度受験勉強に励み、見事1986年に北京電影学院合格を果たした。1988年からは北京電影学院附属映画製作所・青年電影製片廠に入り、本格的に映画の世界へと突き進んでいく。しかし、なかなか陽の目を見ることはなく、しばらくはCMの世界で仕事をこなしていた。転機が訪れたのは1992年飛天賞（テレビドラマ『太陽鴿』）の受賞であった。その後テレビドラマの演出を多く手がけるようになる。そして再度大きな転機が訪れる。2002年、彼にとって初の監督映画作品『雲南の少女 ルオマの初恋』を撮るチャンスがめぐってきたのである。

#### 3.3 李敏（Lǐ Mǐn）のプロフィール

主演の李敏は中国少数民族ハニ族の出身。彼女のデビュー作となった『雲南の少女 ルオマの初恋』に主演し、2003年中国映画金鶏賞最優秀新人賞受賞。2005年、『叢林無辺』（鄭克洪監督）にも出演した。現在（2007年）、女優を続けながら雲南の大学で法学の勉強中。1500人以上のハニ族の少女のオーディションの中から選ばれた。当時16歳の高校生だった。監督からクランクイン前日に主役のルオマ役を告げられ、この朗報に信じられず泣き出し、嬉しくてすぐに両親に電話で報告したという。撮影現場では章家瑞監督は取って彼女に台本を渡さず、カット毎に監督自ら彼女に説明し、撮影をしていった。彼女の一番好きな言葉は「ハニ族は人を騙さない」であるという。<sup>12</sup>

### 3.4 映画の舞台

映画の舞台となったところは雲南省元陽県紅河ハニ族族自治州である。雲南省の省都昆明から南へ約300キロ、ベトナム北部の国境地帯に接している。海拔2千メートル以上の高地で、2千年以上の歴史を有する棚田がまさしく千枚田と称されるように、世界的に有名なところである。「ハニ族は、中国やタイ、ベトナム、ラオス、ミャンマーなど5ヶ国の国境に跨って生活する山地民族である。」<sup>13</sup>。ハニ（哈尼）族の人口は125万人以上。言語はチベット・ビルマ語派イ語群に属する。

### 3.5 ものがたり

物語を追いながらこの映画の中で表現されている監督の意図を見ていきたい。

オープニング。この映画の場所と主人公の紹介が字幕で入る。「雲南省哀牢山の霧深いハニ族の村にルオマという少女がいた。これはルオマが17の時に経験したことである。」

続いてかすかに聞こえてくる機織の音。ルオマの祖母が早朝から機を織る音である。祖母の姿を通してハニ族の伝統的な生活、女性の勤勉さを表現する。ルオマは祖母と二人暮らし。両親はいない。生まれたときから祖母と二人暮らしだと物語の後半にアミンに語るシーンがある。謎めているが、このことについては映画はさらりと流す感じで、深入りはしない。

服装については、「機織機で手織りした衣装で、短いスカートまたはズボンに脚絆という山仕事に適したスタイルである。」<sup>14</sup>といわれているが、まさしくルオマの衣装も祖母の衣装も祖母のハンドメイドと思わせるものである。

村と家屋については、「山の中腹の日当たりのよい場所で裏側と左右に山があり、前方には千枚田を広く作れる所で村を作る。」<sup>15</sup>という。まさに映画もこのような感じになっている。ルオマの家は2階建て。1階は台所と食卓と機織を置いた祖母の仕事場である。2階はルオマの部屋になっている。その部屋から外のバルコニーのようなところに出られる。ここは機織した布を藍染めにし、干すところ、即ち物干し台のようなところといえる。ただ周囲に柵はない。そこからは眼前に千枚田の棚田が広がる。その棚田の中をゆったりと水牛を引いていく老人の姿が映し出される。その後カメラがゆっくりとターンし、ブランコで歓声を上げながら楽しく遊ぶ子供たちの姿を映す。ハニ族の日常生活の一端を表現している。ブランコに関しては、「村の広場には神祠を設け、神々が来訪時に乗る馬と見なすブランコを建てる。」<sup>16</sup>

食事に関しては、ルオマの家での食事シーンが何度か登場する。「主食は赤米である。2回炊きの「二熟飯」を好む。」<sup>17</sup>といわれているが、映像で見る限り、赤米ではなく白米のようなものを調理した緑野菜や焼きとうもろこしとともに食べるシーンがほとんどである。

ルオマは毎日自宅を出て棚田のあぜ道を通り、乗り合いバス代わりのトラクターに揺られ、

町の市場で1本5角(約7円)の焼きとうもろこしを売る生活をしている。祖母の手織りの民族衣装に身を包んだルオマはかわいくて人目をひき、観光客(外国人・漢族)から肖像権無視の写真撮影を強要されるが、肝心の焼きとうもろこしはあまり売れない。

家賃を滞納し、家主から家賃を毎日のように催促されて困っていた写真館経営の青年アミン(漢族・昆明出身)がルオマに近づく。彼からとうもろこしの代金の代わりにウオークマンをなかば押し付けられたルオマは、しかしそれによって外の世界の音楽にはじめて触れる。帰宅しテープレコーダーをずっと聞き続けているルオマとは対照的に黙々と機織る祖母の姿が好対照を織り成す。

雲南省の省都昆明から里帰りした娘ルオシアから都会の生活の話——素敵な男性・エレベーター・恋愛・結婚——を聞き、ルオマは都会に憧れを抱くようになる。ルオマが子牛を貰うことになり、急いで牛小屋を建てるシーンでは、村人総出で、ルオマの牛小屋作りを手伝うハニ族の人々の姿を映し出し、ハニ族の勤勉さ、互助精神、やさしさを表現している。

アミンの客の写真のモデルとなり、初めてアイスクリームをご馳走になったルオマはアミンの写真館に遊びに行く。その壁に貼ってある都会のビルの写真を見て、「このビルにはエレベーターはついてる?乗ったことある?」と無邪気に話すルオマ。アミンの提案でルオマは棚田で観光客相手の写真モデル(1人10元)を開始することになる。

ルオマは帰宅後、無邪気にお金をたくさん稼いだと喜んで祖母に報告する。褒めてもらえると思いきや、祖母は、「ハニ族は人を騙したりしないよ。写真を撮ってお金を稼ぐようなことを誰に教わったの?」とルオマをやんわり諭す。ハニ族は正直な民族であることを強調するシーンである。

お金を稼いだらどうするのかとのアミンの問いに、エレベーターに乗りたいと答えるルオマ。アミンのオレが乗せてやるよ、のセリフに恋心を抱くルオマ。ルオマにとってエレベーターに乗ることは泥玉を好きな人に向かって投げることと同義なのである。

アミンの恋人リリが家賃を持って昆明から訪ねてくる。スリッパ、水を持ってきてと次から次へとアミンに命令するリリを見てルオマは最初はその迫力に圧倒されて呆然としていたが、次第に顎で男性をこき使うリリの姿に怒りを覚えてしまう。気性の激しい漢族の女性と気立ての良いハニ族の女性の対比を非常に単純化して表現しているシーンである。

ルオシアの結婚報告会は興味深いハニ族の習慣である。恋人との別れ酒を衆人環視のもと二人だけで飲み、ルオシアに好意を寄せていた男性アカから彼女に銀の腕輪がプレゼントされる。(同じ村の同年輩の登場人物中名前が出てくるのはこのアカだけである。アカの名前は雲南省以外に住むハニ族はアカ族と呼ばれていることから付けられた名前ではないか。)<sup>18</sup>。帰宅後、ルオマはその様子を一緒に糸をつむぎながら祖母に話す。そしてルオマの祖母の左手首の

大きな銀の腕輪が大きく映し出される。

ハニ族の習慣のひとつ、田植え（稲魂）での男女の泥かけが紹介される。

「稲も人間と同じように魂がある」と信じて、三大祭ばかりでなく、稲の種蒔きから倉入りまで稲霊を祭る儀礼は幾度も繰り返す。各村にはシャーマンが管理する「祖田」があり、各家にも「祖田」が必ず一枚ある。春、苗床へ種子を蒔く時には「稲の目開き」儀礼を、また田植えに先立って「苗開き」の儀礼を行う。稲霊と見なす三手または三列の苗を東に向かって一気に植えて、泥打ち合戦で賑う。」<sup>19</sup>

映画ではこの祭りの世話人然とした人物が、「稲魂様、我らの田に降りたまえ」と声を張り上げると、田植えをしている娘たちのところへ若い男性たちが来て、一人の男性が歌を唄う。

男：「若緑の早苗は麗し乙女よ」

それに呼応して一人の女性が歌を返す。

女：「大きな田圃は逞し若衆よ」

男：「乙女 嫁に来てくれな 田圃に稲穂は伸びやせん」

女：「若衆 乙女を娶ってくれな 伸びた稲穂も実りやせん」

と唄い終わるや否や、泥かけ合戦が始まるのである。

このシーンは迫力もあり、掛け値なしに楽しい、豊作と愛の告白のシーンとなっている。

ルオマの家を訪ねてきたアミンはルオマの祖母に泥かけ儀式にはどのような意味があるのかと質問する。祖母はこたえる。「泥かけは稲が育って豊作を願う行事で、投げ合う泥玉が多いと収穫も良い。投げ合いのとき、若い男女は愛を告白してもよい。これがハニ族の習慣だ。最初の泥玉をハニ族の娘は好きな人に向かって投げる。」このシーンはモジモジと恥ずかしそうに祖母の話を聞いているルオマの可愛さを際立たせている。

家賃を1年以上払わないアミンに業を煮やした家主の家賃取立て場面は激しいシーンである。家賃を払わないからといって、壁に貼ってある写真をずたずたに引き裂き、挙句の果てには夜具もまとめて2階のベランダから表通りに投げ捨ててしまう有様である。家主のすごい剣幕に一言も言えず、ただうな垂れて家主の様子をうかがうことしかできないアミンは実に情けなさがでていて、非常にいい。その大荒れの家主に向かってルオマは「老板はハニ族の人でしょ。ハニは心優しい民族です。」と家主をたしなめ、それによって家主はさすがごと引き上げていく。ここにもハニ族は心優しい民族であることを表現しようとの監督の意図がみえる。



アミンがルオマに会いに来る。アミンが捨てた写真はすべてルオマの部屋の壁に貼ってある。棚田を二人で歩きながら、アミンは明日この村を離れて昆明に帰ることを告げ、エレベーターに乗せる約束が果たせないことを謝る。そのあと田圃に落ちた二人の泥玉投げ。アミンが投げた泥玉がルオマの額に当たる。ルオマはアミンと一緒に昆明に行かせてほしいと祖母に懇願する。淡い恋心が俄かに結婚という現実味を帯びる。祖母は無言のまま機を織り続ける。ルオマは家出を決意する。

翌早朝、祖母は不在。テーブルの上に祖母が準備したタマゴと少しばかりのお金が置いてある。棚田のあぜ道をひた走るルオマ。長距離バスターミナルに着いてみればアミンの乗るはずの昆明行きのバス停にはなんとリリの姿があった。アミンが乗ったバスを追いかけるルオマのいじらしい姿。小さくなっていくバスを呆然と見送るルオマ。カメラはルオマの顔から棚田(千枚田)にターンする。見事な棚田がスクリーンいっぱい広がる。

失恋のショックでルオマは病床についてしまう。「病封じにはシャーマンが患者の魂を招いて患者の体に結ぶ儀式を行う。」<sup>20</sup>そのハニ族の習慣にならい祖母が病封じの招魂の儀式を執り行う。

「ルオマよ、ルオマ、帰っておいで。  
東西南北、何処にあらうと  
ルオマの魂、帰っておいで！  
ルオマ、帰っておいで、  
お前は水面に漂う浮き草なんかじゃない  
お前は水が恋しい魚なんかじゃない  
父さん母さんが生んだ娘だ  
お前は村の貴い娘の一人  
帰っておいで！吉祥安寧の村里へ  
村人たちのこの楽園に  
ルオマよ、帰っておいで」

お粥を作ってきてくれた祖母にルオマは、「私、昆明に行きたいなんてもう絶対に言わないわ。」そのことばを聞いて何も言わずに階段を下りる祖母の姿、物言わぬ祖母の力強さが出ているシーンである。

季節が過ぎ、稲穂が実る季節。棚田が一面緑に覆われている。ピロードを敷き詰めたような見事な棚田が映し出される。ルオマは元のトーモロコシ売りの生活に戻る。かつてのアミン写

真館は家主が経営するコダック特約店に変貌している。アミンから届いた写真集を見てルオマはアミンと心が通じ合っていると確信する。

### 3.6 最後に

ハニ族の棚田をユネスコ世界自然遺産認定申請するために制作された映画であるが、ハニ族の民俗習慣・勤勉等と少女の淡い恋心を織り交ぜ、さりとした初恋物語になっており、いやみはない。観客の心を掴むことに卓越し、そのうえCM制作で鍛えた腕前、美しい映像を撮る監督の技術を十分に駆使された映画となっている。観客をこのロケ地にぜひとも行ってみたいと思わせる作品に仕上がっている。十分に所期の目的は達成されているといえるだろう。

## 4. 『雲南の花嫁』(原題『花腰新娘』)

### 4.1 『雲南の花嫁』の受賞状況

『雲南の花嫁』は『雲南の少女 ルオマの初恋』に続く章家瑞監督の2作目の映画である。

2005年度第11回中国映画華表賞において最優秀映画賞ならびに最優秀新人賞(張静初)を受賞した。さらに第12回北京大学生映画祭においても最優秀女優賞(張静初)を受賞した。日本では2008年7月に公開された。

### 4.2 張静初(Zhāng Jìngchū)プロフィール

張静初は1980年2月2日、福建省福州に生まれた。小さい頃から歌やダンスが好きだったが、母親から声が良くないから歌には向かない、ダンスなんか何の役にも立たない、女の子の見得を助長するだけだと反対され、母の教育方針により張静初は幼児美術学校で絵を習うことになり、俳優になることなど夢にも考えなかった。小学校を卒業した1993年、福建省芸術師範学校に入学した。芸術師範学校卒業後は故郷に戻り小学教師にならざるを得ず、すでに戸籍も入手していた。ところが、最後の夏休みの後、彼女は突如北京行きを決心した。実は、その夏休み期間中、友人の紹介により中央電視台で実習を行い、その期間中、偶然にも中央電視台で働いていたある女性と話す機会があった。幼い頃から絵画を習っているのなら中央美術学院があなたには向いている、北京に来なさいというその女性のことばに張静初の胸は踊ってしまったのである。難敵は母親であった。同意は得られるはずもない。そこで彼女は、北京電影学院化粧班にすでに合格したので、ここを卒業後美術大学に進学するとうそをついた。母親はしぶしぶ同意した。ようやく張静初は学費を手にして上京できたのであった。

張静初是北京電影学院化粧班の進修生となった。空き時間があれば撮影学科の聴講や、映画分析の授業も受けた。その頃から美術大学を受験するという考えは次第になくなり、北京放送

学院の受験を考えるようになっていた。北京放送学院卒業後は福建省に戻り、テレビ番組編成等の仕事に従事できれば理想的だと考えるようになっていた。その年はあらゆる芸術系の大学入試の中で中央戯劇学院監督科の試験が一番早く実施されることになった。張静初は試みに受験してみたところ見事合格したのである。1997年のことであった。その報告を兼ねて郷里に戻り、洗いざらい母親にこれまでのウソも含めて話した。母親は娘を責めたり咎めたりはせず、逆に励ましてくれた。

幸運にも2003年、中国第5世代監督の顧長衛監督作品『孔雀』で映画デビューを果たす。大抜擢であった。張静初は、それ以前は自分の性格は俳優となるにふさわしくない典型的な性格だった、すなわち、俳優とは美人で、性格が外向的で、自己アピールに優れ、自己顕示欲があるものだが、自分にはそのようなものは全くなかったからと回想する。人から女優の張静初だと紹介されると相手の人は私が美人かどうかじろじろ見る、その視線が今でも耐えられないという。

中央戯劇学院監督科を卒業したが、演技については彼女の専門ではないので、与えられた役柄・人物に少しでも近づけるように日々努力の連続である。また他の俳優の演技を観たり、名作中の俳優たちの演技を参考にすることもある。その中でも特に張静初に大きな啓発を与えた俳優はフランス女優イサベル・ユベールであるという。

2003年の『孔雀』以後も2005年には雑誌『TIME』で「亜州英雄」の称号を獲得し、また同2005年に『雲南の花嫁』を含めて『セブンソード』（香港電影金像賞最優秀助演女優賞ノミネート）『情義両重天』『ソフィアの選択』の4本の映画に出演し、さらに2006年には『芳香の旅』でカイロ国際映画祭主演女優賞を獲得している。<sup>21</sup>

#### 4.3 映画の舞台・イ族について

映画の舞台となったところは『雲南の少女 ルオマの初恋』と同じく雲南省元陽県紅河ハニ族イ族自治州である。

つぎに佐野賢治「イ族」<sup>22</sup>を中心に簡単にイ族についてまとめておく。

イ族は雲南・青蔵高原東南に住むチベット・ビルマ語族イ語群に属する民族で、人口は657万人、少数民族のなかでは第6位である。そのうちの圧倒的多数の408万人が雲南省に分布している。雲南省の内でも楚雄イ族自治州、紅河ハニ族・イ族自治州に多く居住する。

言語は6大方言あり、あまり相互に通じあわない。

衣装は各地で異なる。

成人男性は頭にターバンを巻く。頭頂部を天菩薩といい、神聖視し、一生その部分は剃らなかつたが、現代では髪を切る若者が増えてきた。

イ族の歴史については、その族源は牧畜民の氐羌族であり、居住地の黄河上流域から長江上流の金沙江・岷江流域に定住し、次第に農耕民族化していった。

社会的特徴としては奴隸制と家支（jiāzhi）制度が存在した。土地持ちの支配層の黒イは人口の10%、被支配層の白イ・曲諾が人口の50%、奴隸身分の阿加は人口の40%を占めていた。

紛争処理役の有識者を徳古（ドク）といい、イ族の慣習に則って問題を処理した。

畢摩（ビモ）は男子世襲制で、司祭の役目を果たす。占いや厄除け等イ族の生活に関わる宗教者である。畢摩と異なり、蘇尼（スニ）はもっと神がかりのシャーマン・宗教者で、非世襲で、男女とも蘇尼になることが可能である。

#### 4.4 章家瑞監督語る<sup>23</sup>

この映画を撮影した経緯について。

『雲南の少女 ルオマの初恋』が新人賞を受賞する等、少数民族ハニ族が有名になり、次回はぜひ自分たちイ族を映画にして欲しいとイ族の人々・政府から要望があったからである。この物語は1999年の全国龍舞大会において雲南省石屏県哨衝郷のイ族の女性龍舞チームが優勝した史実に基づいている。

イ族の人々の印象について。

伝統文化を尊重する歌と踊りが好きな明るい民族である。生活の中にそれが溶け込んでいる。

監督が雲南にこだわる理由について。

『雲南の少女 ルオマの初恋』を撮ってから好きになった。雲南の青い空、まぶしい日差し等都会生活にはないところに魅力を感じる。

撮影中最も苦勞したことについて。

険しい山が多く、道も狭い。ロケ地に行くのがたいへんで、神様に交通安全祈願して毎回ロケ地に向かった。

イ族の若い世代の民族の伝統観について。

彼らは伝統を重んじ、民族の尊厳を持っている。また、歌で結婚相手を見つけ、ダンスで自己表現しようとしている。

鳳美役の張静初の魅力について。

最初は香港のスー・チーでこの映画を撮る予定だったが、彼女の体調がよくなり張静初になった。張静初のコンタクトレンズのCMを見て、目がとても魅力的だと感じて鳳美役に彼女を抜擢した。彼女は監督の期待以上の演技をしてくれた。彼女の目は説得力がある。美しくてピュアな眼差し、笑顔、笑い声も魅力的で、快活な声のトーンも素敵である。食事のシーンもいい。

中国映画の現状について。

2007年度制作本数は400本以上になった。興行収入も好調である。国際映画祭において受賞する作品も少なくない。ただ、まだまだ規制緩和や投資が不十分であるところが問題点である。

中国の観客の嗜好について。

1980年代は国産映画が中心だった。有名な俳優が出れば観客は映画館に足を運んでくれた。80年代の外国映画は欧米の文芸作品が中心だった。90年代に入ると、映画市場はハリウッド映画や香港アクション映画に占領され、国産映画は張藝謀監督等一部の監督の作品だけとなってしまった。

若手監督の映画制作での苦勞について。

私のころは電影学院を卒業すれば撮影所に配属され、年数を重ねれば順番に映画が撮れた時代であったが、現在は国営の映画制作所はどこも経営難である。したがって若手に投資してくれる会社はほとんどない。

#### 4.5 中国式ミュージカル

『雲南の花嫁』は中国式ミュージカルであるといえる。非常にピュアな歌声で聞くものをうっとりさせると十分な歌声である。主人公の鳳美やその結婚相手の阿龍、その恋敵の阿聡（ビール会社社長にまで登り詰める。出稼ぎ労働者の出世頭）だけでなく、この映画の随所に歌が流れ、その歌が登場人物の心理状態を歌いあげ、またこの映画のストーリーを解説しながら展開していく。

つぎにその代表的な歌をいくつかピックアップしてみることにする。

オープニング。イ族の民族音楽がスクリーンから流れる。字幕を使ってイ族の風習の説明、この映画のテーマでもある結婚・“帰家”について説明する。

「中国雲南省の少数民族イ族は婚礼後3年経って初めて夫婦は同居する。3年後に夫の家に入ることを“帰家”という。」

この説明の後いよいよ物語が始まる。

母（張静初の二役）の事故死の後、父の手ひとつで養育された娘鳳美を歌唱で説明する。

「白鶴が飛び去って1枚の羽を残した  
母さんは死んで歌を1首残した  
馬の背が鳳美の揺りかご  
山と川に囲まれすくすくと育った」

婚礼のシーン。祝いの花火で披露宴が開幕する。イ族の結婚に関するしきたりを仲人が歌唱で説明する。

中国における少数民族を描いた中国映画

「今日のこの佳き日にめでたくも龍と鳳凰が夫婦となった  
2人はしきたりを守って3年間帰家してはならぬ  
帰家して初めて2人は身も心も結ばれる  
共に白髪となるまで連れ添い龍と鳳凰の舞を踊る」

娘龍舞隊の娘たちは田畑の脇を通りながら歌う。

「金の龍と銀の鳳凰が飛んできて金と銀の台に舞い降りた。  
龍と鳳凰は吉祥の象徴。村に幸せを運んでくる。」

娘龍舞隊の娘たちが隣村の男龍舞隊を打ち負かした鳳美のためにみんなで力を合わせてピーフンを作る。

「緑の山に美しい河、愛しの君を待ちわびる娘さん、あの人はいまいずこ？ピーフンを作つてあの人の帰りを待つもの」

村祭りの当日、阿龍の恋敵阿聡が鳳美をダンスに誘おうとして歌う。実は阿龍に対する皮肉である。

「山頂に住むカササギは天高く飛ぼうと必死だが、龍と鳳凰の舞はとても無理。  
飛ぶのは諦めて歌でも歌ったら？飛ぶのはあきらめろ。」

それに対して阿龍は阿聡に反撃する。

「梢の上に止まったオス鷹はメスを見れば貢ぎ物に大忙し  
水でも飲んでさっさと帰れ  
太陽が沈んだら帰れなくなるぞ  
じゃまするな。」

その後イ族の女性歌手の村祭り開会の歌が続く。

「年頃の若者たちと年頃の娘たちが歌を歌い、踊りを踊る。」

その場の若者たちが歌を歌いながらダンスする。特に阿聡が鳳美を誘って踊る「煙盒舞」は非常にエネルギッシュで、セクシーで、魅力的なダンスである。阿聡ほど上手にダンスが踊れない阿龍はただただ嫉妬し、焼きもちを焼くばかりである。

大喧嘩をする鳳美と阿龍。阿龍は鳳美に結婚の象徴である「花腰帯」を放り投げて、離婚を宣言する。

しかし、鳳美を失って初めて知る寂しさ、彼女に対してますます深く愛情を感じる阿龍の心理状態を歌った歌がスクリーンから流れる。これは阿龍の心の中の声である。

「一千年が経っても嫁入りの輿には乗らない  
一万年が経っても新床には入らない  
母さんなしではお嫁には行かない  
話が合わなければ一言も喋りたくない」

恋敵阿聡から鳳美が一途に愛しているのはお前だけだと諭された阿龍はこれまでのつまらないわだかまりが吹っ切れて、民家の屋根の上で龍の舞を踊る。太鼓のリズムに合わせて踊るこの屋上での龍舞「酔龍舞」は迫力満点である。

阿龍から花腰帯をつき返され結婚を破棄された鳳美が歌う：

「結婚の帯に赤い脚絆、金の鯉に金の鶏  
金の鯉や鶏は捕まえられても愛しい人の心は捕まえられない」

それに対して反省しきりの阿龍が歌う：

「結婚の帯を捨てるなんてことはもう絶対にしないから許してくれ  
結婚の帯はきちんと心に巻きつけて  
たとえナタで切られても手放したりしないよ、決して放さない」

こうして二人は愛を確かめ合ったのである。

#### 4.6 結婚と自由の問題

『雲南の花嫁』はイ族の伝統的な独特の民俗習慣、衣装、風景を紹介しながらも普遍的な結婚問題——結婚と自由の問題——にまで踏み込んだ問題提起をしているとも考えられる。

結婚後3年間は一緒に住めないというイ族のしきたりに反発し、娘龍舞隊のコーチである阿龍と少しでも一緒にいたいという思いから最初は娘龍舞隊に入隊したいと考えていた鳳美。しかし、のちに、「独身時代は龍舞を踊り楽しかったが、結婚後は自由がない。」と嘆く兄嫁のセリフを聞き、また、3年経っていないにもかかわらず、事故を起こしたためその賠償金弁済のために娘龍舞隊を脱退して一日でも早く帰家してほしいという夫側の勝手な言い分で悩む小七

妹の姿を見て、鳳美は最初はあれほど同居を望んでいたにもかかわらず、帰家すれば娘龍舞隊を脱退しなければならず、アーロンを拒否する。

阿玉の場合は帰家の問題ではないが、若い娘の揺れ動く心理を表現していて考えさせられるものがある。許婚の父親の社会的地位が高く、資産家であることが理由で阿玉の親が勝手に結婚話を決める。そのため最初は回りも驚くほど非常に毛嫌いしていたその彼とラストシーンでは仲良くバイクに乗り「町にも遊びに来てね」とかつての娘龍舞隊の仲間呼びかけるほどの変心振り。北京の大学生映画祭においてその心変わりを質問された阿玉役の女優は「女性の自立の限界を描いたのだと思う。」<sup>24</sup>と語ったという。

帰家後は自由がない—龍舞を踊ることが許されない—鳳美やチーメイたち娘龍舞隊に参加する女性は帰家を望まないのである。そういう意味では映画の大半を民族衣装を着て龍舞を踊るイ族の女子龍舞隊の娘たちが実に生き生きして、爽やかないい味を出している。

#### 4.7 張静初語る

張静初は鳳美と映画デビュー作品『孔雀』の姉とを比較して、「彼女（鳳美）と『孔雀』の姉とはまったく正反対の性格の持ち主、但しどちらも極端な人物です」<sup>25</sup>

この映画の撮影現場について張静初は、「私たちの『雲南の花嫁』組は女の子が多く、龍舞だけでも12人の女の子たち、仲良く穏やかな雰囲気、一番楽しかった組でした。山の中で撮影が行われるので、毎回試写の際には2、3時間車に揺られて別の町に行かなくてはなりません。試写の日はちょうどお祭りの日でしたので数日前からとても興奮していました。県城の映画館で試写会を行った際、土地の人たちもこっそりと映画館にもぐりこんでいたのです。私たちがまだ理解していないうちに後ろのほうからクッククックという笑い声がよく起こりました。私たちが後ろを振り返って見てみますと、なんとそこには各民族衣装を身に付けた人たちがいたのです。本当にそのときは楽しかったです。私はこのようなプロセスが必要なんだ、結果はそれほど重要ではなく、このようなプロセスがあればそれで十分なのだと思うようになったのです。」<sup>26</sup>

#### 4.8 最後に

『雲南の少女 ルオマの初恋』と異なり、出演者はみな漢民族のプロの俳優であり、全員漢語を話すところに違和感を若干感じましたが、嫁が舅姑のために足湯を準備するしきたり—イ族の嫁の仕事—に悪戦苦闘する鳳美の姿、大きなきゅうりを食べて水分補給する鳳美の姿、「過橋米線」を実に美味しそうに食べる鳳美の姿等の演出も実にユーモラスで見ていて飽きない演出となっている。



また、あの普段は気の弱い阿龍による屋上での龍舞は迫力満点で、見ごたえ十分であった。

鳳美が空の雲を見上げるシーンが2箇所出てくる。中ほどとラストである。中ほどで鳳美が見上げる雲は完全な龍の形にはまだなりきっていない。娘龍舞隊のメンバーの心がひとつになっていない表れである。ところが、ラストシーンの鳳美が見上げる雲はしっかりとした龍の形になっている。それを見上げている鳳美の顔からかすかに笑みが現れる。娘龍舞だけでなく、村のみんなの心がひとつになったと確信したあらわれであろう。鳳美の視線の先にあるもの——一族の団結と幸福を象徴しているように思われる。

## 5. 全体のまとめ——中国映画の現状と課題

陸川、王全安に比較すれば章家瑞は年齢的には彼等より年上であり、第5世代に近いといえるが、北京電影学院の卒業年およびその後の彼の仕事ぶりからみて第6世代といえるだろう。この3人の共通点を強いて挙げれば、北京電影学院卒業生、中国の一般大衆の日常を撮る、人の魂を撮る、地下映画は撮らない、美しい映像を撮る、中国の現実社会を撮る、じっくり考え腰を落ちつけて映画を撮る、というようなことになるであろう。

近年、中国映画は年間400本以上制作されている。改革開放政策によって中国映画界も開放された結果であろう。しかし、中国映画市場の改革開放はまだ不十分である。不十分であるために画一化された映画制作がまだかなり多いといわざるを得ないというのが若手監督たちの声である。題材の選択、表現方法においてもさらなる改革開放を望みたい。

中国映画界はいまだに第5世代監督の映画に依存していることは否めない。それは中国国内に限らず、日本においてもそうである。張藝謀の最新作と聞けばやはり映画館に足を運ぶ人は多い。

陸川、王全安、章家瑞の作品を見てきたように、彼等の作品は中国国内はもちろん海外の国際映画祭においても高い評価を博し、数々の賞を受賞してきたのである。しかし、若手監督は彼等なりに中国映画界を取り巻く現状の厳しさを認識している。若手監督の中には資金が潤沢にあれば大型映画を撮りたい監督もいるのである。しかし、1990年代に入るとハリウッドの大型映画によって中国映画市場はかなり占められるようになり、その結果、中国国内映画産業は経営状況が相当厳しいのが現状である。したがって、若手監督に潤沢な資金を投資してくれる企業は少ない。若手監督の映画では多くの観客動員は見込めない。良い興行成績は望めない。その結果、知名度のある大物第5世代監督に投資するほうが無難であると企業が算盤をはじくのも頷ける。

## 中国における少数民族を描いた中国映画

しかし、若手監督もただ指をくわえて項垂れてはいない。数少ないチャンスを活かして国内外の映画祭での賞を受賞し、海外の企業からの投資を受けるようになった若手監督も出現するようになった。彼等および彼等に続く若手監督の今後の活躍から目が離せない。期待したい。

### (注)

1. 李彦「陸川談『可可西里』及其他」(『大衆電影』2004年第17期)
2. 李彦「陸川談『可可西里』及其他」(『大衆電影』2004年第17期)
3. 李彦「陸川談『可可西里』及其他」(『大衆電影』2004年第17期)
4. 李彦「陸川談『可可西里』及其他」(『大衆電影』2004年第17期)
5. 李彦「陸川談『可可西里』及其他」(『大衆電影』2004年第17期)
6. 王陳「走向国際的低調余男」(『大衆電影』2007年6期)
7. 王陳「走向国際的低調余男」(『大衆電影』2007年6期)
8. 王陳「『凶雅の婚事』埋藏的愛情」(『大衆電影』2007年5期)
9. 王陳「『凶雅の婚事』埋藏的愛情」(『大衆電影』2007年5期)
10. 王陳「『凶雅の婚事』埋藏的愛情」(『大衆電影』2007年5期)
11. 王陳「『凶雅の婚事』埋藏的愛情」(『大衆電影』2007年5期)
12. 「映画のワンシーンから『雲南の少女 ルオマの初恋』」(NHKテレビ「中国語会話」2007年8月号)
13. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
14. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
15. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
16. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
17. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
18. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
19. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
20. 曾紅「ハニ族」(『月刊シニカ』2000年1月号 大修館書店)
21. 以上、主に王陳「張静初：孔雀開屏」(『大衆電影』2005年6期)
22. 佐野賢治「イ族」(『月間しにか』(2000年1月号 大修館書店)
23. 「雲南の花嫁パンフレット」、「映画の森・『雲南の花嫁』チアン・チアルイ監督に聞く」(<http://www.cinema.janjan.jp/0807/0807220547/1.php>) を主に参照。
24. 水野衛子『私が愛する中国映画』(外文出版社2008年)
25. 王陳「張静初：孔雀開屏」(『大衆電影』2005年6期)
26. 王陳「張静初：孔雀開屏」(『大衆電影』2005年6期)